

齋藤 博・来 新夏 編著：

『日中地方史誌の比較研究』

学文社 1995年6月

A5判 331ページ 3,914円

地方史誌は歴史地理学の分野では身近な存在でありながら、史資料としての性格、特徴、中国の方志との比較等の書誌学的検討は十分に行なわれてきたとは言いがたい。本書は、日本、中国両国において、長年、地方史誌の編纂に携わってきた歴史学や歴史地理学の碩学の論文集である。編者を中心とした地方史誌に関する日中の学術交流の成果が、計12本の論文となって公刊された。去年刊行された日本語版に続いて、本年1月天津の南開大学出版社から中国語版が出され、両国の歴史地理研究者に広く膾炙することとなった。内容は次の通りである。

第一篇 日本における地方史誌の研究

第一章 地方史と民衆史—自分史の視座から—
(芳賀 登・色川大吉の対談：司会齋藤 博)

第二章 近現代地方史の課題—地域の農民・兵士像をめぐる—(大濱徹也)

第三章 市史づくりの問題点—地方史研究の諸潮流の成果と欠陥を考えながら—(齋藤 博)

第四章 関東地方の誌史類における「誌」と「史」に関する若干の考察—中国「方志」との関連を視点として—(犬井 正)

第五章 地域社会史づくりの原点に立ちて (齋藤 博)

第二篇 中国における地方史誌の研究

第一章 中国における「新方志」編集活動の回顧と展望 (酈 家駒)

第二章 地方志研究の状況と趨勢 (来 新夏)

第三章 地方志と地方志の資料的重要性について (譚 其驥)

第四章 歴史地理学と方志学 (史 念海)

第五章 史志文体論 (傅 振倫)

第六章 方志と現代科学—現代河南省方志の新たな編纂事業を切り開く—(楊 静琦)

第七章 県志の編纂方法 (費 黒)

第一篇の芳賀登・色川大吉両氏の対談では、戦後歴史学の再生と創造のなかで民衆史の視座を確立し、その発展方向として全体史と対置させた自分史を歴史創造の主体として提唱するに至る経緯が語られる

が、歴史学再生の要として民衆を位置付けるに至る両碩学の長年の研鑽と情熱には圧倒される。

大濱徹也氏は市民による市史創造の基点に立ち、近代史のなかで、民衆の原像である兵士や農民の書簡や日誌から民衆の心情、国家・近代化との関係を掘り起こし追体験していくことが、地域形成としての市史作りに重要であるとする。また民衆生活の地域差やその要因にも目を向けるべきと鋭く指摘する。

齋藤博氏は地方史研究の過去の潮流を振り返り、新たに市民有志による地域学習に基づく市史作り運動を提言する。同氏は第五章で中国の「方志学」や「四史」に地域社会史作りの原点があるとする。

犬井正氏は関東地方の誌史類の比較から、内容上には大きな差異が存在しなくても「誌」より「史」が多用される理由として、様式が固定化した地方誌より郷土史にロマンを感ずるためであり、地誌学の方法論を導入することにより新たな地方誌像をつくるべきであるとする。

日本篇では、論者が我孫子市史の編纂に関わる過程で望ましい市史作りの姿を模索してきたことが基底にある。新しい地方史誌の創造に向けて、実践を踏まえた貴重な提言に溢れ、その真摯な姿勢には深い感銘を受ける。今後、地方史誌の編纂に関わる場合、本書で提言されている課題は基本的な問題意識とされるべきであろう。

第二篇では、酈家駒、来新夏、譚其驥、傅振倫各氏が歴史学の立場から、方志類の歴史的発展過程と現状について、方志の資料批判、文体のありかたも含めて詳述する。方誌編纂が王朝時代から現代まで国家の重要な統治事業の一つとして一貫して重視され、現在も自然科学、社会科学の専門家やその成果を総動員して行なわれている状況には、伝統のさらなる発展が窺われる。史念海氏は歴史地理学の立場から、かつて方志学が歴史地理学と乖離してきたことが、事項羅列的になる等の方志の形骸化を生み出したとする。楊静琦氏と費黒氏は、河南省方志と天津特別市の簫山県志の編纂者の立場から、方志と現代科学との関係や編纂形式、方針についての指針を述べる。

中国篇では、方志学の伝統を如何に継承あるいは改善してよりよい編纂を進展させるかという問題意識が底流にある。社会科学院の主導のもと、共通した統一基準での編纂が求められ、省の地方志協会では審査を受けてから発行が許可されるという徹底さで、

地方誌には経済建設のための科学的資料の役割が期待され、日本の地方史誌とは大きく異なることが印象的である。一般住民向けとはいいがたく、そのためか中国語版の序には、日本側で強調される住民の主体的な学習活動による編纂の方法が新鮮な驚きで受けとめられている。

旧志（1949年以前の方志）では、県以上の行政レベルの方志が行政官の行政報告書的性格が強かったのに対して、郷鎮志、村志には郷土意識、都邑意識がみられるように思われる。帝国の論理とは異なる基層社会の論理は、方志のなかにどのように反映されていくのか興味深い。

今後、地方史誌に関する日中の交流が進展するにつれ、相互の地方史誌の現状紹介・比較が行なわれ、編纂のあり方が引き続き議論されていくことが望まれる。その際、「史」と「誌」にそれぞれ偏る傾向にある日中の地方史誌に対して、歴史地誌などの視点・方法を呈示することにより、歴史地理学が交流の土台となれるのではなかろうか。

本書は、地方史誌の利用や編纂についての様々な留意点、方向性を示唆する啓発に満ちた必読の書といえる。

（森 勝彦）